

1) 博士論文名：

西谷順平『会計保守主義の研究 -会計史の経済分析と GAAP の再発見-』

2) 目次： 別添の通り。

3) 各章の要約

序章では、問題提起が行われている。そこでは、昨今、国際会計基準の策定を契機として、世界各国の会計基準が同じ俎上で議論されるようになり、それを受けて、会計基準設定における多くの基本的論点が改めて問われるようになってきており、会計保守主義が、そういった基本的論点のうちの重要な一つとして数えられることが指摘されている。その上で、しかしながら、保守主義は、会計実務上、会計基準設定上、そして、会計学上におけるその大きな存在感とは裏腹に、これまで明確な定義が共有されないまま、その是非について議論が繰り返されてきた興味深い概念であり、昨今の保守主義についての議論も錯綜していることが紹介されている。そこで、保守主義をめぐる議論を整理し、会計基準設定についてのより本質的な議論を可能にするために、改めて保守主義とはそもそも何だったのかについて素朴に問い直すことの必要性が提起されている。

この問題提起を受けた本論部分は、2部構成となっている。まず、第1部では、保守主義を会計情報にかかる下方バイアスだとおおまかに捉え、現在の会計情報システムにおける位置づけを議論した上で（第1章）、会計実務の発達してきた歴史のなかでどのように育まれてきたのかについて、その背景とロジックが分析されている（第2、3章）。そして、第2部では、会計情報システムにおいて、下方バイアスがどのような影響をもたらすのかについて分析した上で、保守主義のタイプを四つに類型化し（第4章）、それらについて二つずつ分析がおこなわれている（第5、6章）。各章の概要は以下のようにまとめられる。

第1章では、序章の問題提起を受け、会計上の保守主義について考察していく最初の作業として、その前提となる会計情報システムと保守主義の関係について再検討されている。そこでは、そもそも会計情報作成とはどのようなものであり、保守主義などといった方針ないし思考がそこへどのように介在することができるのかという基本的な論点が考察されている。また、現代の会計実務を前提にして、どのような会計情報システムが実際に採用されており、そこへ保守主義がどのように介在しているのか、さらに、そこでの会計基準の役割と限界について、保守主義との関係から改めて確認が行われている。第1章の議論からは、保守主義が会計情報システムに対して三種類の影響を与えることが確認されている。つまり、同じ下方バイアスでありながら、保守主義には三つのタイプがあることが指摘されている。また、その議論の過程において、現在の会計実務で採用されている会計情報システムの一般的な解釈から、「保守主義のパラドックス」が導かれることが示されている。そして、保守主義を具現化した会計基準がもし存在するとすれば、それはすべて会計基準体系の限界事例であり、会計情報システムにエラーを生じさせるものであることが指摘されている。

第2章では、会計実務の発達してきた歴史を、その起源から中世イタリア時代まで、保守主義

をキーワードとして考察している。これは、なぜ現在の会計基準体系が、会計研究や会計基準設定そのものよりも長い歴史を持つ、低価法といった保守的な会計実務を包摂して設定されなかったのか、そして、なぜ現在においても、減損会計といった限界事例を新たに会計基準体系に加えるのかという、前章での問題提起に答えるためであると説明される。その議論の過程においては、現代の会計保守主義には、「慎重主義」と「伝統主義」という意味で「保守主義の二重性」が認められることが指摘されている。また、材料がなく推論するしかない保守主義と会計の起源との関係について考察するために、神経科学についても触れられている。第2章の議論からは、現代の保守主義のルーツが、実現基準と低価法からなる「フィレンツェの保守主義」にあったこと、そして、それが複式簿記システムの完成と同時に、会計情報システムのプログラムとしてインストールされていたことが確かめられている。そこでは、清算・再投資の擬制のもとで分配利益計算が行われていたが、「支払いの不可逆性」のために、とくに組織が大きくなってくると、下方バイアスをかけるインセンティブが生じていたことが、定式化された上で証明されている。

第3章では、前章で確認された「フィレンツェの保守主義」が、その後、社会経済の発展とともに、どのような経緯をたどったのかについて考察されている。第1章では、なぜ600年以上もの歴史のある低価法を現在の会計基準体系にとりこまなかったのか、なぜ現在においても、保守主義を否定しながら、減損会計という保守主義を具現化したような限界事例を体系に新たに加えようとするのかという問題提起が行われていた。それに対して、本章では、保守主義が、どのように社会に定着し伝統となっていったのか、そして、なにゆえ現代において否定的な取り扱いがなされるようになってしまったのかという、その経緯とロジックについて検討が行われている。その議論の過程においては、固定資産の出現により「フィレンツェの保守主義」をどのように適用すればよいのかを考えなければならなくなったことが、近代会計学発祥の契機となったことが指摘されているほか、固定資産会計の問題をどのように解決していくかについて、ドイツやイギリス、アメリカでそれぞれ異なる経緯をたどったことが示される。本章の議論からは、「フィレンツェの保守主義」がヨーロッパ大陸において商法に取り込まれ定着していくことが確認されている。しかし、その後、固定資産会計が出現したことにより、そういった伝統的な会計フレームワークが解体され、減価償却を正当化する新しい会計フレームワークと共存していくことになったことが示される。そして、その状況において「保守主義の原則のパラドックス」の問題が生み出されること、また、その問題を回避しようとしても「保守主義のジレンマ」を抱えてしまうことが指摘されている。最後に、アメリカにおいては、期せずしてこの「保守主義のジレンマ」を抱えてしまった経緯が示されている。そして、その結果として、保守主義は否定されながらも、見えない上位概念として存在しており、それゆえに第1章の分類におけるタイプ3の保守主義が会計基準体系に残され、また生み出されているという結論が、第1章の問題提起に対して与えられている。

第4章では、会計情報システムに対して下方バイアスをかけることの帰結について考察が行われている。第3章では、株式市場に役立つ理想的な会計情報システムがいずれ策定されたとして、

そこで保守主義が本当に必要とされないのかという問題提起が行われていた。一般に、バイアスがかかることは、情報を歪めることになり、情報の有用性を損なうこととして理解されている。本章では、その点について、改めて具体的な会計情報システムを設計し、それを分析することで確かめている。その議論の過程においては、会計情報システムが有用であるためには単調尤度比特性 (MLRP) が条件であること、また、システムチックな下方バイアスが良い結果についての第一種過誤を増加させるという悪い効果を生み出すが、同時に、第二種過誤を減少させるという良い効果も生み出すことが指摘されている。そして、それらが結びつくことで、保守主義がグッド・ニュースの情報有用性を高めるという GN ハイライト効果を生み出しうるということが確かめられている。さらに、保守主義についての実証研究の問題点と課題が提示されている。本章の議論からは、会計情報システムの観点からみて、下方バイアスが会計情報の有用性を必ずしも低下させるだけではないことが示されている。また、その効果に従って、保守主義は 3 タイプに分けることができ、それらが実際にひとつの会計情報システムで共存できることが定式化によって示されている。そして、現在の会計基準体系によって規定される会計情報システムについても、それら 3 タイプの保守主義が基本的にはすでに存在していることが確認される。このことは、会計基準設定機関が現在の会計基準体系に内包している保守主義の会計基準を排除するのは合理的ではないことを示唆していることが指摘されている。最後に、第 1 章から第 4 章までの議論が図によって集約され、四つのタイプの保守主義が示されている。

第 5 章では、前章において条件付保守主義として分類された二つのタイプの保守主義、タイプ 3-Ⅲとタイプ 2-Ⅱについて、それらの条件について考察している。第 4 章では、これらのタイプの保守主義は、どちらも会計基準体系に採用するべきではないことが示されていた。ただし、タイプ 3-Ⅲは会計基準設定の政治的プロセスによって採用されうること、また、タイプ 2-Ⅱは会計基準の不完備性によって行使されうることがあった。本章では、それらの保守主義が需要される条件について、モラル・ハザード・モデルを使って分析されている。その議論の過程において、まず、タイプ 3-Ⅲについては、会計基準設定機関が、このタイプの保守主義を採用した場合に、どのような条件のもとで下方バイアスがかかるのかについて分析がおこなわれている。次に、タイプ 2-Ⅱについては、会計情報が独り歩きして企業の利害を決定してしまう状況として、確定決算主義をとりあげ、企業がこのタイプの保守主義を採用して下方バイアスにかかる条件が分析されている。本章の議論からは、タイプ 3-Ⅲの保守主義については、ビジネスの成功確率が十分に低いとき、あるいは、会計情報システムの精度が十分に高いとき、企業がこのタイプの保守主義を採用するのが合理的となることが示されている。こういった条件は、低価法や減損会計の採用が合理的であることを示唆していると説明されている。他方、タイプ 2-Ⅱの保守主義については、税費用の期待値が十分高いとき、企業がこのタイプの保守主義を採用するのが合理的となることが示される。また、税務当局の利害があわせて分析され、確定決算主義のもとでは、会計基準設定機関と税務当局がお互いに協力しあって会計基準を設定していくインセンティブをもっていることが示されている。

第6章では、無条件保守主義として分類される二つのタイプの保守主義、タイプ3-IIとタイプ1-Iについて分析が行われている。第4章において、タイプ3-IIは、会計基準体系に採用すべきではないが、会計基準設定機関の判断により裁量的に採用されるものであることが示されていた。一方、タイプ1-Iは、必ず採用すべき下方バイアスであることが示されていた。本章では、前者に対しては、エラーの反転効果を考慮しても、なお会計情報システムの有用性を落とすのかどうかについて分析されている。後者に対しては、どの程度の保守主義が採用されるのかについて分析されている。その議論の過程においては、会計情報がキャッシュフローにアンカリングされているために、情報エラーが必ず後の期間で修正されるという、反転効果について議論が行われている。そして、反転効果を反映した会計情報システムを組み込んだ、二期間のモラル・ハザード・モデルが分析されている。一方、タイプ1-Iの保守主義については、それが、会計情報の意思決定有用性の構成要素である、信頼性を意味していることが指摘される。そして、最適な目的適合性と信頼性の組み合わせを選択するという、会計基準設定機関の意思決定問題として定式化されたモデルが分析されている。本章の議論からは、タイプ3-IIの保守主義については、たとえ反転効果が存在しても、会計基準設定機関はこのタイプの保守主義を採用するには多大な社会的コストをとまなうことが示される。一方、タイプ1-Iの保守主義の分析を通して、信頼性と目的適合性の最適な選択結果については一般的な傾向が存在せず、そういった状況において補足情報が重要性を増したり、会計情報の外縁が広がっていったりすることが示されている。最後に、キャッシュフロー計算書が、信頼性を補償する補足情報として重要であることが示される。その点で、清算・再投資の擬制から離脱した、固定資産出現時あたりにキャッシュフロー計算書の起源があることが推察されている。

終章では、これまでの第1部と第2部の議論をまとめた上で、会計基準設定機関に対する5点のコメントという形で議論が締めくくられている。すなわち、1) 保守主義にタイプが四つあることを認識すべきである、2) また、キャッシュフロー計算書の保守主義補完機能を認識すべきである、3) その上で、保守主義の原則は撤廃すべきである、4) しかし、現在の保守的会計基準を即座に撤廃する必要はない、5) ただし、「保守主義のジレンマ」を自覚すべきである、というものである。なかでも、筆者は、会計基準設定機関自身が「保守主義のジレンマ」を抱えていることを自覚すべきであるという最後の点をもっとも重要であると述べている。なぜなら、この自覚がないまま保守主義をめぐる会計基準設定の議論をおこなっていることが、序章で提起されていたように、保守主義の議論を錯綜させることに大きくつながっていたと考えられるからである。

4) 参考文献：別添の通り。

目次

序章	1
0.1 問題提起	1
0.2 本書の構成と概要	5
第 I 部 会計保守主義とは何か？	13
第 1 章 会計情報システムと保守主義	15
1.1 本章の課題	15
1.2 会計情報の外縁と裁量	16
1.3 会計情報システムの選択	18
1.4 市場の役割と会計の保守性	20
1.5 会計基準と保守的裁量	23
1.6 保守主義のパラドックス	25
1.7 限界事例としての保守主義	27
1.8 小括 – 保守主義の 3 タイプ	29
1.9 おわりに	31
第 2 章 会計史と保守主義 (1)	35
2.1 本章の課題	35

2.2	保守主義の二重性	37
2.3	複式簿記前史	40
2.3.1	会計の起源と保守主義	40
2.3.2	神経科学と保守主義	42
2.3.3	古代ローマ	45
2.3.4	中世ヨーロッパ	47
2.4	複式簿記システムの完成 –中世イタリア–	48
2.4.1	『スムマ』の積極主義	48
2.4.2	フィレンツェの保守主義	51
	低価法の原初記録	51
	限界事例としての評価	52
	“counting”の“accounting”への内部化	55
	分配利益計算のための清算・再投資の擬制	58
	原則としての時価評価、例外としての原価評価	59
	小括	62
2.5	「フィレンツェの保守主義」の分析	64
2.6	おわりに	70
第3章	会計史と保守主義(2)	73
3.1	本章の課題	73
3.2	債権者保護と保守主義の法令化	75
3.3	固定資産の出現と保守主義の適用問題	79
3.3.1	「例外の例外」としての原価評価	79
3.3.2	保守主義の適用問題と近代会計学の萌芽	82
3.3.3	私的契約のもとでの利害調整	84
3.3.4	小括 –減価償却、減損会計、「企業にとっての価値」	87
3.4	減価償却の意義づけと「保守主義のジレンマ」	90

3.4.1	擬制からの離脱としての減価償却	90
3.4.2	「保守主義の原則のパラドックス」	93
3.4.3	「保守主義のジレンマ」	97
3.4.4	アメリカのジレンマ	99
3.5	おわりに	106
第 II 部	会計保守主義の分析	111
第 4 章	会計情報システムの保守主義モデル	113
4.1	本章の課題	113
4.2	会計情報システムと会計情報の有用性	115
4.3	保守主義の GN ハイライト効果	118
4.4	保守主義のタイプとモデリング	121
4.4.1	保守主義のタイプ	121
4.4.2	タイプ I の保守主義	124
4.4.3	タイプ II の保守主義	127
4.4.4	タイプ III の保守主義	130
4.4.5	保守主義のモデリング	133
4.4.6	タイプ間の相互関係	137
4.5	おわりに	140
第 5 章	条件付保守主義の分析	147
5.1	本章の課題	147
5.2	タイプ 3-III の採用条件	149
5.2.1	経済的設定	149
5.2.2	タイムラインとモデル	151
5.2.3	分析	154

5.2.4	解釈	157
5.3	タイプ 2-II の行使条件	159
5.3.1	モデル	159
5.3.2	分析	162
5.3.3	解釈	166
5.4	おわりに	169
第 6 章	無条件保守主義の分析	173
6.1	本章の課題	173
6.2	タイプ 3-II の分析	175
6.2.1	モデル	175
6.2.2	分析	180
6.2.3	解釈	181
6.3	タイプ 1-I の分析	184
6.3.1	モデル	184
6.3.2	分析	188
6.3.3	解釈	191
6.4	おわりに	196
終章		199
引用文献		205

引用文献

AAA, AMERICAN ACCOUNTING ASSOCIATION, COMMITTEE TO PREPARE A STATEMENT OF BASIC ACCOUNTING THEORY (1966) *A Statement of Basic Accounting Theory*: Sarasota, FL: American Accounting Association, (飯野利夫訳『アメリカ会計学会 基礎的会計理論』国元書房、1969年) .

AHMED, ANWER S., BRUCE K. BILLINGS, RICHARD M. MORTON, AND MARY STANFORD-HARRIS (2002) “The role of accounting conservatism in mitigating bondholder-shareholder conflicts over dividend policy and in reducing debt costs,” *TAR*, Vol. 77, No. 4, pp. 867-890.

AHMED, ANWER S., MICHAEL NEEL, AND DECHUN WANG (2013) “Does mandatory adoption of ifrs improve accounting quality? preliminary evidence.,” *Contemporary Accounting Research*, Vol. 30, No. 4, pp. 1344 - 1372.

ASB, ACCOUNTING STANDARDS BOARD (1996) *Discussion Paper: Measurement of tangible fixed assets*.

ASH, HARRISON BOYD (1941) *LUCIUS JUNIUS MODERATUS COLUMELLA ON AGRICULTURE WITH A RECENSION OF THE TEXT AND AN ENGLISH TRANSLATION VOL.1 (RES RUSTICA I – IV)*, LONDON: WILLIAM HEINEMANN LTD.

BALL, RAY AND PHILIP BROWN (1968) “An empirical evaluation of accounting income numbers.,” *Journal of Accounting Research*, Vol. 6, No. 2, pp. 159 -

178.

- BANKER, R.D. AND S. DATAR (1989) "Sensitivity precision, and linear aggregation of signals for performance evaluation," *Journal of Accounting Research*, Vol. 27, No. 1, pp. pp. 21-39.
- BASU, SUDIPTA (1997) "The conservatism principle and the asymmetric timeliness of earnings," *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 24, No. 1, pp. 3 - 37.
- (2009) "Conservatism research: Historical development and future prospects," *CHINA JOURNAL OF ACCOUNTING RESEARCH*, Vol. 2, No. 1, pp. 1-20.
- BEAVER, WILLIAM H. AND STEPHEN G. RYAN (2005) "Conditional and unconditional conservatism: concepts and modeling.," *Review of Accounting Studies*, Vol. 10, No. 2/3, pp. 269 - 309.
- BELKAOUI, AHMED (1985) *Public Policy and the Practice and Problems of Accounting*, Westport, Connecticut: Quorum Books.
- BLISS, JAMES. H. (1924) *Management Through Accounts*, New York: The Ronald Press Company.
- CHATFIELD, MICHAEL (1996) "Conservatism," in Chatfield, Michael and Richard Vangermeersch eds. *The History of Accounting: An International Encyclopedia*, New York: Garland Publishing, Inc. pp. 160-167.
- CHEN, QI, THOMAS HEMMER, AND YUN ZHANG (2007) "On the relation between conservatism in accounting standards and incentives for earnings management," *Journal of Accounting Research*, Vol. 45, No. 3, pp. 541-565.
- DICKHAUT, J. W., SUDIPTA BASU, K. A. McCABE, AND G. B. WAYMIRE (2009) "Neuroaccounting, part i: the human brain and reciprocal exchange.," Working Paper, Chapman University, Temple University, George Mason University, and Emory University.

FASAC, FINANCIAL ACCOUNTING STANDARDS ADVISORY COUNCIL (2005) *Conceptual Framework-Joint Project of IASB and FASB, Attachment F -Neutrality and Faithful Representation*, Norwalk, CT.

FASB, FINANCIAL ACCOUNTING STANDARDS BOARD (1974) *Statement of Financial Accounting Standards No.2, Accounting for Research and Development Costs*, Norwalk, CT: FASB.

—— (1980) *Statements of Financial Accounting Concepts No.2: Qualitative Characteristics of Accounting Information*, Norwalk, CT: FASB, (広瀬義州訳「財務会計諸概念に関するステートメント第2号 会計情報の質的特徴」平松一夫・広瀬義州共訳『FASB 財務会計の諸概念 (増補版)』中央経済社、2002年、pp.45-144) .

—— (1985) *Statements of Financial Accounting Concepts No. 6: Elements of Financial Statements*, Norwalk, CT: FASB, (平松一夫訳「財務会計諸概念に関するステートメント第6号 財務諸表の構成要素」平松一夫・広瀬義州共訳『FASB 財務会計の諸概念 (増補版)』中央経済社、2002年、pp.267-408) .

FELTHAM, GERALD A. AND JIM XIE (1994) “Performance measure congruity and diversity in multi-task principal/agent relations.,” *Accounting Review*, Vol. 69, No. 3, pp. 429 - 453.

GIVOLY, DAN AND CARLA HAYN (2000) “The changing time-series properties of earnings, cash flows and accruals: Has financial reporting become more conservative?” *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 29, No. 3, pp. 287 - 320.

GUENTHER, DAVID A., EDWARD L. MAYDEW, AND SARAH E. NUTTER (1997) “Financial reporting, tax costs, and book-tax conformity,” *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 23, No. 3, pp. 225 - 248.

TEN HAVE, O. (1973) *De geschiedenis van het boekhouden*: Delwel, (A. van

- Seventer 訳 *The History of Accountancy*, Bay Books: California, 1976、三代川正秀訳『新訳 会計史』税務経理協会、2001年)。
- HEALY, P. M. AND K. G. PALEPU (1993) "The effect of firms' financial disclosure strategies on stock prices," *Accounting Horizons*, Vol. 7, No. 1, pp. pp. 1-11.
- HOLMSTRÖM, B. (1979) "Moral hazard and observability," *The Bell Journal of Economics*, Vol. 10, No. 1, pp. pp. 74-91.
- HOWARD, STANLEY E. (1932) "Public rules for private accounting in france, 1673 and 1807," *Accounting Review*, Vol. 7, No. 2, pp. 91-102.
- JOHNSON, L. TODD (2005) "Relevance and reliability," *The FASB Report*, February 28.
- KAHNEMAN, DANIEL AND AMOS TVERSKY (1979) "Prospect theory: An analysis of decision under risk," *Econometrica*, Vol. 47, No. 2, pp. pp. 263-292.
- KNUTSON, BRIAN, CHARLES M. ADAMS, GRACE W. FONG, AND DANIEL HOMMER (2001) "Anticipation of increasing monetary reward selectively recruits nucleus accumbens," *The Journal of Neuroscience*, Vol. 21, No. RC159, pp. 1-5.
- LAMOND, ELIZABETH, F. R. HIST. S., W. CUNNINGHAM, AND D. D. (1890) *Walter of Henley's Husbandry, Together with an Anonymous Husbandry, Seneschau-cie, and Robert Grosseteste's Rules*, London: Longmans, Green, and co.
- LARA, JUAN MANUEL GARCÍA, BEATRIZ GARCÍA OSMA, AND FERNANDO PENALVA (2009) "The economic determinants of conditional conservatism," *Journal of Business Finance & Accounting*, Vol. 36, No. 3/4, pp. 336 - 372.
- LIN, HAIJIN (2006) "Accounting discretion and managerial conservatism: An intertemporal analysis," *Contemporary Accounting Research*, Vol. 23, No. 4, pp. 1017 - 1041.
- LITTLETON, ANANIAS CHARLES (1933) *Accounting evolution to 1900*, New York: Russell & Russell, (片野一郎訳『リトルトン会計発達史 (増補版)』同文

- 箱、1995年)。
- (1941) “A genealogy for ‘cost or market’.” *Accounting Review*, Vol. 16, No. 2, p. 161.
- LUCAS, FRATER (1959) *Summa de arithmetica, geometria, proportioni et proportionalita (partial reproduction)*, 森山書店, 東京, (翻訳: 片岡泰彦『イタリア簿記史論』第7章、森山書店、1988年、pp.174-247)。
- MATTESSICH, RICHARD (2000) *The beginnings of accounting and accounting thought: accounting practice in the Middle East (8000 B.C. to 3000 B.C.) and accounting thought in India (300 B.C. and the Middle Ages)*, New York: Garland Publishing.
- MICKWITZ, G. (1937) “Economic rationalism in graeco-roman agriculture,” *The English Historical Review*, Vol. 52, No. 208, pp. 577-589.
- OHLSON, JAMES A. (1995) “Earnings, book values, and dividends in equity valuation.” *Contemporary Accounting Research*, Vol. 11, No. 2, pp. 661 - 687.
- PARKER, R. H. (1965) “Lower of cost and market in Britain and the United States: An historical survey.” *Abacus*, Vol. 1, No. 2, pp. 156 - 172.
- PATON, W. A. AND A. C. LITTLETON (1940) *An Introduction to Corporate Accounting Standards*, American Accounting Association monograph No.3, Columbus, Ohio: American Accounting Association, (中島省吾訳『会社会計基準序説(改訳版)』森山書店、1958年)。
- PENNDORF, BAULDUIN (1930) “The relation of taxation to the history of the balance sheet.” *Accounting Review*, Vol. 5, No. 3, p. 243.
- (1933) *Luca Pacioli, Abhandlung über die Buchhaltung 1494*, Stuttgart: Schaffer-Poeschel Verlag.
- RENOUARD, YVES AND BERNARD GUILLEMAIN (2009) *Les Hommes d’Affaires Italiens du Moyen Age*, Paris: Tallandier, (Nouv. Édition. À l’origine d’après les notes de l’auteur / par Bernard Guillemain).

- SANDERS, THOMAS HENRY, HENRY RAND HATFIELD, AND UNDERHILL MOORE (1938) *A STATEMENT OF ACCOUNTING PRINCIPLES*, New York: American Institute of Accountants, (山本繁・勝山進・小関勇共訳『SHM 会計原則』同文館、1979年) .
- SCHMALENBACH, VON EUGEN (1956) *Dynamische Bilanz*, Opladen: Westdt. Verl. (土岐政蔵訳『十二版・動的貸借対照表論』森山書店、1959年。ただし、原書初版は1919年。) .
- SCOTT, WILLIAM R. (1975) "Auditor's loss functions implicit in consumption-investment models.," *Journal of Accounting Research*, Vol. 13, No. 3, pp. 98 - 117.
- (2006) *Financial Accounting Theory*, Toronto, Ontario: Pearson Education Canada Inc. 4th edition, (太田康広・椎葉淳・西谷順平共訳『財務会計の理論と実証』中央経済社、2008年6月) .
- SHACKELFORD, DOUGLAS A. AND TERRY SHEVLIN (2001) "Empirical tax research in accounting," *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 31, No. 1&2, pp. 321 - 387.
- SPENCE, M. (1973) "Job market signaling," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 87, No. 3, pp. 355-374.
- DE STE. CROIX, G. E. M. (1956) "Greek and roman accounting," in Littleton, Ananias Charles and B. S. Yamey eds. *Studies in the History of Accounting*, London: Sweet & Maxwell Limited, Chap. Greek and Roman Accounting, pp. 14-75.
- STERLING, R. R. (1970) *Theory of the Measurement of Enterprise Income*, Lawrence, Kansas: University of Kansas Press.
- STERLING, ROBERT R. (1967) "Conservatism: The fundamental principle of valuation in traditional accounting.," *Abacus*, Vol. 3, No. 2, pp. 109 - 132.
- VANCE, LAWRENCE L. (1943) "The authority of history in inventory valuation.,"

- Accounting Review*, Vol. 18, No. 3, p. 219.
- VENUGOPALAN, RAGHU (2004) *Conservatism in Accounting: Good or Bad?*, Chicago, IL: University of Chicago, Working Paper.
- WATTS, ROSS L. (2003a) "Conservatism in accounting part i: Explanations and implications.," *Accounting Horizons*, Vol. 17, No. 3, pp. 207 - 221.
- (2003b) "Conservatism in accounting part ii: Evidence and research opportunities.," *Accounting Horizons*, Vol. 17, No. 4, pp. 287 - 301.
- WOOLF, ARTHUR H. (1912) *A Short History of Accountants and Accountancy*, London: Gee & Co. Ltd. (片岡義雄、片岡泰彦訳『ウルフ会計史』法政大学出版社、1977年6月)。
- ZHANG, JIEYING (2008) "The contracting benefits of accounting conservatism to lenders and borrowers," *Journal of Accounting and Economics*, Vol. 45, No. 1, pp. 27 - 54.
- 足立浩 (2011) 「管理会計論における「脱会計」現象の歴史的基盤とその今日的意味—会計としての概念規定をめぐって—」, 『日本福祉大学経済論集』, 第43号, 103-125頁。
- 新井清光 (1985) 『企業会計原則論』, 森山書店, 東京。
- 泉谷勝美 (1964) 『中世イタリア簿記史論』, 森山書店, 東京。
- 大日方隆 (1993) 「実現収益の測定」, 斎藤静樹 (編) 『財務会計』, 有斐閣, 東京, 第5章, 107-126頁。
- (1994) 『企業会計の資本と利益—名目資本維持と実現概念の研究—』, 森山書店, 東京。
- (2013) 『アドバンスト財務会計』, 中央経済社, 東京, 第2版。
- (2013) 『利益率の持続性と平均回帰』, 中央経済社, 東京。
- 春日淳一 (2003) 『貨幣論のルーマン—<社会の経済>講義—』, 勁草書房, 東京。
- 片岡泰彦 (1988) 『イタリア簿記史論』, 森山書店, 東京。

- 片岡義雄(1960)『パチョーリ「簿記論」の研究(増補版)』, 森山書店, 東京.
- 川島健司(2008)「イギリス会計基準における資産価値評価 -value to the business の研究-」, 『経営志林』, 第44巻, 第4号, 59-70頁.
- 企業会計基準委員会(2004)「討議資料『会計情報の質的特性』」, 『討議資料『財務会計の概念フレームワーク』』.
- 岸悦三(1975)『会計生成史-フランス商事王令会計規定研究-』, 同文館出版, 東京.
- 斎藤静樹(1984)『資産再評価の研究』, 東京大学出版会, 東京.
- 三邊金藏(1957)「動態論における貸借対照表」, 『企業会計』, 第9巻, 第8号, 89-99頁.
- (1959)「リトルトン氏の動態的貸借対照表論」, 『産業経理』, 第19巻, 第2号, 6-12頁.
- 清水廣一郎(1975)『イタリア中世都市国家研究』, 岩波書店, 東京.
- 染谷恭次郎(1983)『財務諸表三本化の理論』, 国元書房, 東京.
- 醍醐聰(2004)『会計学講義』, 中央経済社, 東京, 第3版.
- 醍醐總(1994)「確定決算基準と逆基準性」, 『JICPA ジャーナル』, 第466号, 41-45頁.
- 千葉準一(1991)『英国近代会計制度』, 中央経済社, 東京.
- (2009)「商法計算規定の形成」, 『経済志林』, 97-124頁.
- 千代田邦夫(2008)『貸借対照表監査研究』, 中央経済社, 東京.
- 友岡賛(1996)『歴史にふれる会計学』, 有斐閣, 東京.
- 橋本寿哉(2009)『中世イタリア複式簿記生成史』, 白桃書房, 東京.
- 平田廣則(2003)『情報理論のエッセンス』, 昭晃堂, 東京.
- 古市峰子(2003)「非会計情報の開示の意義と開示規制のあり方」, 『金融研究』, 第22巻, 第1号, 41-75頁.
- 平敷慶武(1986)「低価基準と保守主義原則」, 『大阪府立大学経済研究』, 第31巻, 第2号, 153-173頁.

- 本田耕一 (1975) 『パチヨリ簿記論』, 現代書館, 東京.
- 茂木虎雄 (1969) 『近代会計成立史論』, 未来社, 東京.
- 森川八州男 (1969) 「テェア・フェーン教授のサヴァリー観-サヴァリー会計研究の一側面-」, 『商学論叢』, 第 52 卷, 第 4-5 号, 119-146 頁.
- 森田哲弥 (1979) 『価格変動会計論』, 国元書房, 東京.
- 山添昌彦 (2004) 「フランス初期商法上の決算財産目録の構造」, 『松本大学研究紀要』, 第 2 号, 141-184 頁.
- 吉田千草 (2000) 「ルカ・パチョーリ『算術・幾何・比及び比例全集』(貴重書紹介)」, 『図書の譜 (明治大学図書館紀要)』, 第 4 号, 119-134 頁.
- 米山正樹 (2001) 『減損会計-配分と評価-』, 中央経済社, 東京.
- 渡邊泉 (2005) 『損益計算の進化』, 森山書店, 東京.
- 渡辺和夫 (1992) 『リトルトン会計思想の歴史的展開』, 同文館出版, 東京.
- 渡辺陽一 (1959) 「ドイツにおける貸借対照表生成の背景」, 『福島大学商学論集』, 第 28 卷, 第 3 号, 96-129 頁.
- (1960) 「ドイツにおける貸借対照表論生成の背景 (二)」, 『福島大学商学論集』, 第 28 卷, 第 4 号, 36-81 頁.